

カタヒバ

加藤文字

いろいろなシダを鉢の中で育てている。その中でも一番多いのはカタヒバであり、特殊な存在とも言える。単植でいるわけではなく、木ものの盆栽から野草の盆栽まで種類を問わず胞子を飛ばして着生しているのだ。

それも日向の棚の盆栽でも、日陰の棚であってもどこにでも姿を見せる。

カツラや五葉松の根元や、一鉢に数種の野草が共存する中にも、間をぬうように見え隠れしながら生息している。あるいは、同族のシノブの鉢の中に入り込んで、微妙に色感の異なるみどりが独特な調和を見せる。数えあげたらきりが無い。

苔が草木に馴染むように、当たり前のようにいるので、あえて名前を問われることもない。当たり前すぎて、存在を意識されない。

私が一番最初に見ていたシダは、もしかするとカタヒバであったのかもしれない。そんな馴染み深いシダが草木の間に加減よく点在する様子は、皆をまとめ調整役を担っているかのように見える。実際、それぞれの植物の輪郭を整えて表情をゆたかにしていると思う。

晩秋から真冬にかけてほとんどの野草は地上部を枯らして冬眠する。野草が姿を消した



あとに残るのは、黄金色に紅葉した常緑種のカタヒバである。真冬のカタヒバは、別名が「黄金ヒバ」であることを思い出させる。

そうして春が訪れて陽気が暖かくなるとともに、黄金色のシダにみどりの色がよみがえる。そのみどりの葉の間から、萌黄色の新葉も加わって姿をあらわす。芽吹いた雑木や冬眠から覚めた野草と合流して、鉢の中は再びにぎやかになる。

カタヒバは地味ではあるけれど、なくてはならない脇役であるのかもしれない。